

放蕩息子の散財 —長崎版画「阿蘭陀人康楽之図」とイギリス製銅版画

塚原 晃（神戸市立博物館）

本発表は、18～19世紀の日欧における、ルカ福音書「放蕩息子の散財」のイメージ流布について考察するものである。

江戸時代、18世紀半ばより長崎で描かれ刊行された「長崎版画」は、この港町の異国情緒あふれる事象を題材にしている。その主題のひとつにオランダ人の宴席がある。その多くが、給仕の少年が運んでくる料理を、商館員たちが大きなテーブルを囲んで穏やかに楽しむ光景である。しかし同じ宴席風景でも「阿蘭陀人康楽之図」の内題をもつ版画（神戸市立博物館蔵）は異彩を放っている。

本図では画面やや左寄りに2組の男女がテーブルを囲んで食事をともにしているが、右側の男女はかなりはめをはずした様子で、女性は右手でグラスを高く掲げ、男性は大胆に体をよせて彼女に抱きついている。彼の足元には空の酒瓶が無造作に転がっているのも、ほとんど我を失っているのだろう。左側の男女がその様子を楽しげに見守るなか、右側に置かれたもうひとつのテーブルの前を、給仕の少年が新しい料理を運んでやってくる。

当時の長崎出島にはオランダ人女性の滞在が禁じられていたので、このような光景がまったくの絵空事なのは言うまでもない。しかも「阿蘭陀人康楽之図」の図様そのものは、実際の日蘭貿易や出島商館とは内容的に全く関係のない、あるイギリス製銅版画（1760年代、セバスチアン・ルクレール(子)原画）に基づいていることが判明した。

この銅版画（大英博物館、イェール大学英国美術センター蔵）に描かれる宴会風景は、そのテーブルの配置や人物のポーズが「阿蘭陀人康楽之図」とほぼ同様であり、影響関係が明らかである。しかしあの泥酔した男性に同席しているのは、銅版画ではすべて女性となっており、また給仕の少年ではなく老女が、もうひとつのテーブル上に散らかったコインなどをかき集める様子が描かれている。「阿蘭陀人康楽之図」ではただの空白だった背景には、隣室のベッドが見えている。つまり、彼女たちに囚われてしまった男性は身ぐるみ剥がされる運命にある。

この銅版画（またはその原画）は、ルカ福音書の「放蕩息子」のたとえ話を題材にしたシリーズ物のひとつである。デルフト製陶磁器の絵付にも描かれるなど、ルクレールによるこの図様は欧州である程度評判を得たと考えられる。さらに上述の銅版画がオランダ船によって日本にも舶来し、「阿蘭陀人康楽之図」に転用されるに至った。さらに「唐蘭風俗図屏風」（福岡市博物館蔵）などの絵画作品に、あの酩酊し抱き合う男女のイメージが取り込まれるなど、18世紀末期から19世紀前半にかけての日本絵画にも波紋を広げたことが窺える。